

つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業づくり（3年次）

～子どもが友だちの表現に「価値」を見出すことができるようにするための教師の働きかけを通して～

道徳科における「つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業」について

学習指導要領解説にもあるように、学校全体における道徳教育において、子どもの道徳性を育てなければならない。この道徳性を育てる基盤となるものの一つに「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）がある。子どもは、道徳の授業を通して抽象的、論理的に考える力を高め、行為の結果と共に、その動機も考えることができるようになる。また、相手のことを考えた行動がとれるようになり、共によりよく生きようとする力が引き出される。そして、最も重要なことは、子どもが自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深めることができるようにしていくことである。

道徳科における「つながり」とは、「自分の考えを伝えたい」「友だちの考えを聞きたい」という思いをもって、主体的に友だちとかかわろうとすることである。また、「知的な深まりを楽しむ」とは、友だちのとのかかわりを通して、最初に考えていたことと違った新しい考えをもてた自分や友だちの変化に気づきながら、語り合うことである。道徳科の授業は、「自分の考えを友だちに伝える」「友だちの考えを聞く」など、友だちとつながらないことには成立しない。そこで、教師は子ども同士をつなげるために、子どもの状態を見取りペアやグループでの活動を取り入れる。ここで子どもは「友だちに考えを聞いてもらいたい」「友だちの考えを聞きたい」と友だちとつながろうとし始めるのである。そして、友だちとつながった子どもは、「Aさんの考えは～なのだ。私と同じだ」や「私は、はじめは反対の考えだったけど、Bさんの考えを聞くと…」などと、友だちの考えたことについて考え始める。そこで、もう一度自分の考えを見つめ直すことで、自分の考えを確かなものにしたり、新たな考えをもったりするなど考えを深めながら語り合いを始めるのである。

このような考えのもと、道徳科における「つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業」を、一人一人が本音を言い合い友だちの考えを聞くことで新たな考えに出合い、自分の考えを再構築しながら、友だちと思考を深め合っている姿が見られるような授業だと捉える。

1. 子どもを「共通の土台」に乗せるための働きかけ

(1) 授業導入時での一人ひとりの道徳的価値を引き出し、比較させる

道徳科の授業では45分間の中で子どもが変容する姿が幾度となく垣間見える。また、その変容を子ども自身も自覚することが自己の生き方について考えを深めることにつながっていくのである。変容とは、自分にはなかった考え方に気づく（発見）当たり前と思っていたことを改めて考える（再認識）自分の考えがより確かなものになる（強化）最初に考えていたことが変わる（変化）等であると道徳部は捉え、授業実践に取り組んでいる。授業で道徳的価値に出合った子どもたちは生活経験を基に自分の考えをもち始めるが、道徳的価値を深く考えることができている子、表面的な考え方をしている子、考えが思いつかない子等、子どもたちの状況は様々であり、考えている内容も多種多様である。そこで教師は、「なるほど、～と考えているんだね」や「まだ考えられていない人もいるね」等と、全ての子どもたちの状況や考えを受け入れながら道徳的価値に対する考え方を表面化させていくことが共通の土台に乗せることであり、自己の変容を自覚するための第一歩であると考ええる。

本時では、導入場面で本時の道徳的価値「礼儀」に対するそれぞれの素直な表現を引き出しておく。そして、授業の中心場面で改めて「礼儀」について考えさせ、中心場面での自分の考えと導入場面での自分の考えを比較させたり、友だちの考えをタブレットで見て、友だちの考えと自分の考えを比較させたりすることで自分の道徳的価値の変容が自覚できるようにするのである。本時では、変容の中でも（発見）の変容が多いことが予想されることから、以下に（発見）の具体例を記述する。

《導入での「礼儀正しい」に対する考え》

元気な声で挨拶できる人が礼儀正しいと思う。



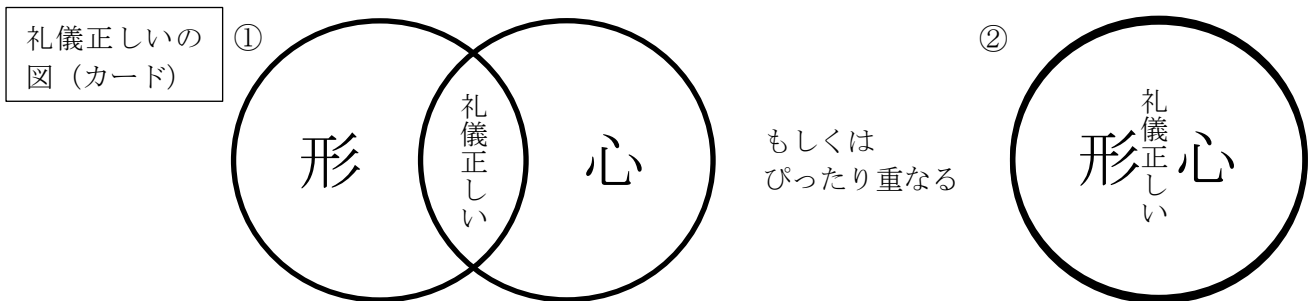
《変容（発見）した「礼儀正しい」に対する考え》

今までは大きい声で挨拶することとかお辞儀することが礼儀正しいと思っていたけど、相手のことを最大限に考える心も礼儀正しいということには大切だということが分かった。

(2)「礼儀正しい」ということについて、図(カード)を使ってイメージ化を図る

子どもたちが考えを伝える時の手段は言葉がほとんどである。授業中に考えたことは吟味されたものや吟味されていないものに関わらず発言や記述で表現することが多い。しかし、実際に子どもたちが考えたことを言葉にして伝えることは難しい場合がある。例えば、「親切、思いやり」という道徳的価値では、「相手のことを考えて助ける」も「相手のことを考えて見守る」もどちらも思いやりがと言える。しかし、その判断の基準やどれくらい助けることが「親切、思いやり」につながるのかといったことはその時の状況や相手によって変わってくることが多い。子ども一人ひとりが45分で学んだ「親切、思いやり」を自分なりの言葉で表現することはできるが、真の意味で表現することは難しい。そういった言葉では表現しづらいことを数値化したり、図で表したりすることで自分の考えがより明確になったり、相手に伝わりやすくなったりするのではないかと考える。

本時では、「礼儀正しい」ということを、図(カード)を使ってイメージさせる。男の人が礼儀正しいかどうかの判断には、「形」と「心」の観点で意見が出されることが予想される。この2つの観点を黒板上で書き分けることで子どもから「何だか2種類に分けられている」といった趣旨の発言を引き出し、礼儀正しいということは「形」と「心」の2つの様子があることに気づかせ、「形」と「心」の2つのカードを提示する。そして「この2つがどうなったら礼儀正しいってことなの?」と問いかけることで、図(カード)を活用しながらそれぞれの考える「礼儀正しい」ということについて表現させいく。



2. 子どもが友だちの表現に「価値」を見出すことができるようになるための働きかけ

(1) 子どもの意見を見取り、繰り返し問い返したり、揺さぶったりする

授業中の子どもたちの発言の中には様々な要素が含まれている。授業中によく聞こえてくる発言としては、世間一般的にこう言えば正解だろう。こう考えるのがよい答えだろう。といった模範解答的な発言や、「この時は～と思ったと思う」「(登場人物の)〇〇さんは～の気持ちが大きいと思う。だって…」といった表面的で当たり前な発言が挙げられると思われる。そういった発言に対して教師はそのまま受け取らず「～ってどういうこと?自分の言葉で話してみて」「～ってみんな考えるんだね。なるほど」などと問い返したり、揺さぶったりしていく。そうすることで、「そう言われると…」や「みんなではない。自分だったら」と少しずつ本音を言い始める。その本音の中に授業でねらいとする道徳的価値を見取り、「今〇〇くんが言った意味が分かる人?」「親切の意味を自分の言葉で話してくれるかな」などと返し、子どもたちの素朴な発言からねらいとする道徳的価値を掘り下げていくことが必要である。

本時で子どもたちと明らかにしたい道徳的価値は「礼儀正しいとは相手を最大限に思いやる心と、その心を行動や発言にして目で見える形にして相手に伝えること」である。その価値を見出すことができるように、子どもたちの発言に対して問い返したり、揺さぶったりしていく。授業の流れで具体的にすると、教材の中に、子どもたちが導入時でもっていると思われる「礼儀正しい」に対するイメージとは違う姿をした男の人が現れる。その姿が礼儀正しいと言えるのか、言えないのかといった話合いの中で「挨拶とか丁寧な言葉づかいができる人が礼儀正しい人だから、男の人は礼儀正しいとはいえないよね」と揺さぶることで、「礼儀正しいとは挨拶や言葉づかいだけではないのかも…」という新たな気づきや、「例えば先生たちが会議をしている時に元気よく挨拶するのは礼儀正しい?」と問い返すことで、「その場合だったら〇〇した方が礼儀正しい。だって…」といった自分の考える価値をより友だちに分かりやすく伝えようとする汎用化の視点が見られ始めると考える。

《問い返しや揺さぶりの引き出し》

- ・挨拶とか丁寧な言葉づかいができる人が礼儀正しい人だから、男の人は礼儀正しいとはいえないよね。
- ・優しいと礼儀正しいとは違うものなんだね。
- ・親切と礼儀正しいは同じ?違う?
- ・男の人は何も言っていないのになぜ思いが伝わったのかな。
- ・例えば先生たちが会議をしている時に元気よく挨拶するのは礼儀正しい?

第3学年B組道徳科学習指導案

日 時 令和3年12月17日(金) 6校時
場 所 3B教室
指導者 和田 直之

1. 主題名 真心をもって B-8 礼儀
2. 教材名 「れいぎ正しい人」(生きる力③: 日本文教出版)
3. ねらい

○礼儀正しいという価値に対するそれぞれの考えを基にして、若い男の人の姿を礼儀正しいかそうではないか話し合うことを通して、礼儀正しいとは相手のことを思いやる心とその心が見えるように、行動や発言などで形にすることが大切だということに気づき、礼儀正しく接しようとする態度を育てる。

4. 主題設定の理由

人が社会生活を円滑に送るうえで、相手に対し真心をもって接することは大変重要なことである。相手の状況を捉え、その気持ちに寄り添って真心をもって行動する時、そこにはおのずと礼儀の姿があらわれる。礼儀は、丁寧なあいさつや言葉遣い、気持ちのよい所作などとしてあらわれるが、その振る舞いの裏には、相手への優しさや心遣い、すなわち真心が必ず存在するのである。ここでは、真心をもった礼儀正しい振る舞いが周囲の人々をすがすがしくさせてくれることに気づかせ、誰に対しても心を込めて礼儀正しく接しようとする態度を育てたい。

中学年のこどもは、生活体験を通し、人と接する時には丁寧なあいさつや言葉遣い、気持ちの良い所作などが大切であることについては知っている。また、そうした振る舞いをしようとする姿も見受けられる。しかし、とっさの場面などでは恥ずかしさや戸惑いから、礼儀正しい振る舞いができなかったり、気の合う友だち同士の間ではおろそかになったりすることもある。また、礼儀正しい振る舞いの裏には「やさしさ」があることに気付いている児童は少ない。ここでは、心のこもった対応が相手とのよい関係を築くうえで大切であることに今一度気づかせ、誰に対しても心を込めて礼儀正しく接しようとする態度を育てる。

本学級の子どもは、誰に対しても礼儀正しく接しようとする子どもが多い。授業中や休み時間に関わらず、相手の立場に立って発言したり、行動したりしようとする姿が多く見られる。給食の調理員さんに対して、給食室を尋ねて「いつもおいしい給食をありがとうございます」と感謝の言葉を伝えに行ったり、誕生日会で担任ではない教員に場所や道具を借りる場合に、事前に借りることを知らせに行き、終わったら「貸していただいてありがとうございました」といった言葉を伝えたりすることが自然にできる。しかし、普段から仲がよい友だちに対しては雑な対応をしてしまったり、心のこもっていない形だけの対応で相手に不快な思いをさせてしまったりすることがある。「礼儀正しい」とはどういうことか話し合う中で、自分も相手も気持ちよく過ごすためには、相手のことを思いやる「心」とその心を行動や発言で表す「形」の両方を大切にしながら、礼儀正しく接することの大切さに気づかせたい。

本時では、まず導入で「礼儀正しい人ってどんな人？」と問いかける。「ちゃんと挨拶ができる人」「言葉づかいが丁寧な人」「お礼がきちんと言える人」などといった導入時での「礼儀」に対する素直な表現を引き出し、1時間の自分の考え方の変容や気づきが自覚できるようにする。次に、登場人物の行動や発言から「礼儀正しいといえるか、いえないか」ということについて判断させる。その中で、「わかい男の人」の姿は「礼儀正しい」「礼儀正しいとはいえない」「どちらともいえない」の3つの立場の判断に分かれることが想定される。タブレット端末で立場の違いを明確にさせることで子どもたち同士の「礼儀正しい」という価値観についての認識のズレが生まれ「どうして礼儀正しいの?理由を聞きたい!話し合いたい」「礼儀正しいよ!だって…」などといった思いを引き出し、「礼儀正しいとはいったい何なのか」ということを話し合わせる。ここでの話し合いでは、子どもが道徳科の見方・考え方を働かせながら話し合えるように、教師は子どもの発言を見取り、広げる返しを繰り返し働きかけていく。例えば「まさとおお父さんのためにドアを持ってあげていたから」という意見に対して、「男の人は何も言っていないのになぜその思いが伝わったのかな?」と問い返す。そうすることで言葉がなくても思いが所作に表れる。心が行動となって表れるということに気づかせる。といった感じである。次に、改めて「礼儀正しい」について考えさせる。この時点での考えを授業始めの自分の「礼儀正しい」に対する考えと比較させることで、変容や気づきを自覚させ、言語化させる。授業の最後では、本時で学んだことや考えたことをノートに書かせ、自分の本時での学びを振り返らせるようにする。

5. 本時の学習

学 習 活 動 【主な発問(○)、中心発問(◎)と予想される子どもの反応(-)】	教師の働きかけ(・) 評価の観点(□)
1. 本時の道徳的価値について考える ○礼儀正しい人ってどんな人ですか。 －ちゃんと挨拶ができる人。 －言葉づかいが丁寧な人。 －お礼がきちんとと言える人。	・導入時での本時の道徳的価値(礼儀)に対するそれぞれの素直な表現を引き出す。そうすることで1時間の自分の考え方の変容や気づきが自覚できるようにする。
礼儀正しいとは？	
2. 教材 P136 3行目まで読んで話し合う ○この話で礼儀正しいのはだれかな。 ①まさお －礼儀正しいと思う。だってお辞儀もしているし、挨拶しているから。 －職員室の先生に礼儀正しい人っていわれているから。 ②スーパーの店員さん －礼儀正しいよ。大きな声で挨拶をしているからね。 －店員さんが礼儀正しくなかったらお客さんが来なくなるしね。 ③わかい男の人 ◎若い男の人は礼儀正しいといえるのか。 ◇礼儀正しいといえる －相手のことを考えて(真心)行動しているから。 －まさおやお父さんが喜んでいるから。 －まさおやお父さんが気持ちよく通れるようにした行動が礼儀正しいと思う。 ◆礼儀正しいとはいえない －挨拶もしていないし、話してもいないから礼儀正しいとはいえないと思う。 －親切だとは思いますが、礼儀正しいとはいえないんじゃないかな。 －礼儀正しいかといわれたら微妙だな…。優しいとは思いますが。 ◎礼儀正しいとは何だろうか。 －大きな声で挨拶するのも、人のためにドアをもってあげるのも礼儀正しいと思うよ。だって両方とも相手のことを思う心があるからこその行動だからね。 －今までは大きい声で挨拶することとかお辞儀をすることが礼儀正しいと思っていたけど、相手のことを考える心も礼儀正しいには大切だということが分かった。 －心も形も大切ってなんとなく思っていたけど、今日の学習で、相手のことを最大限に思いやる心と、その心でどうしたらお互いが気持ちよく過ごせるか考えた行動の両方がそろって礼儀正しいってことが改めて分かったよ。	・登場人物の行動や発言から礼儀正しいかどうかを判断させる。その中で「わかい男の人は？」と問いかける。ここで子どもたちは「礼儀正しい」「礼儀正しいとはいえない」「どちらともいえない」の3つの立場に分かれることが想定される。そうすることで子どもたち同士の「礼儀正しい」という価値観についての認識のズレが生まれ「どうして礼儀正しいの？理由を聞きたい！話し合いたい」「礼儀正しいよ！だって…」などといった思いを引き出し、「礼儀正しいとはいったい何なのか」ということを考えさせるきっかけにさせる。 ・「まさおとお父さんのためにドアを持ってあげていたから」という意見に対して、「男の人は何も言っていないのになぜその思いが伝わったのかな？」と問い返す。そうすることで言葉がなくても思いが所作に表れる。心が行動となって現れるということに気づかせる。 ・話し合いの中で出された意見を2種類にかき分ける。かき分けることで、礼儀正しさは「心」と「形」に分けられることに気づかせる。そして「心」と「形」のキーワードと図を使いながら提示し「これがどうなると礼儀正しいってことなのか？」と問いかけることで、「礼儀正しい」「心」「形」の関係をイメージ化させる。 ・子どもたちの状況によって、礼儀正しいとは相手のことを思いやる心と、それを行動や発言で形にすることが大切だという考えを全体で共有した後に、「例えば、先生たちが会議をしているときにまさおが元気に挨拶するのはどう？」と具体的な場面を示して問いかける。そうすることで、「それは礼儀正しいとはいえないよ。自分だったらお辞儀だけにするよ」といった発言を引き出し、新たに見えてきた礼儀正しさを子どもの言葉で表現させながら一般化を図る。 ・授業始めの「礼儀正しい」に対する考え方と比べ、改めて「礼儀正しい」についてノートに記述させる。そうすることで自分の考え方の変容や気づきを自覚させ、言語化させる。
3. 今日の学習をふり返る ○学んだことを「ふり返り」に書こう。	□礼儀正しいとはどういうことか、ということについて自分の考え方の変容や気づきを自覚し、自分なりに言語化することができたか。

6. 板書計画

